HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 伊勢物語・定家建仁二年書写本の本文再建の試み |
| Author(s) | 林, 美朗 |
| Citation | 国語国文研究, 114, 27-38 |
| Issue Date | 2000-01-10 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/94684 |
| Type | journal article |
| File Information | kokugokokubunkenkyu_114_27-38.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 伊勢物語・定家建仁二年書写本の本文再建の試み

林　美朗

## 一

伊勢物語の生成や伝流を考える上で、ポイントとなるような伝本が幾つか伝存する。定家本系統の建仁二年書写本もその一つであるが、この系統には現在、専修大学図書館蔵の寂身本（以後、専修大本と略称）と、最近複製本も刊行された、冷泉家時雨亭文庫蔵の伝為家筆本（以後、冷泉家本と略称）の二本が知られている。いずれも定家の自筆本ではなく、鎌倉時代中後期頃の転写本であるが、本稿においてはこの二本の対比を中心として、定家建仁二年書写本の本文の再建を試みてみることにしたいと思う。

## 二

ところでその前に、なぜそのような煩瑣な作業が必要となるのかを、伊勢物語の生成や伝流史をも考慮に入れた、勢語諸本系統論を振り返りながら、簡単に述べておくことにしたいと思う。

次に提示したところのものは、[1]数多く伝存している伊勢物語の諸本を、平安末から鎌倉初期辺りにまで遡って整理してみた場合、まずそれらは小式部内侍本（狩使本）系統と朱雀院塗籠本（初冠本）系統の二大系統に収束させることができ、後者は更に、当時の〝普通本〟の姿を現在に伝えていると考えられる、従来のいわゆる広本系諸本の一部に相当する普通本第一類と、そこから鎌倉初中期頃に別れ出でたと考えられる、従来の狭義の塗籠本こと、略本の伝民部卿局筆本や広本の泉州本、又真名本系諸本等に下位分類することができることを示したものである。そして、現存諸本の大多数を占める通行百二十五段本系統の定家本系諸本等は、実はそれらの諸本のせめぎ合いの中から生まれ出でたと考えるのが妥当と思われるという意味で、それらは他の別本（古本）系諸本も含め、全て普通本第二類としておくのが妥当であるように思われる。すなわちその意味では十三世紀初頭の建仁二年という時期は、このように平安末から鎌倉初期にかけての勢語の生成過程や諸本伝流の揺動の激しい時期

小式部内侍本（狩使本）系統〈散佚〉
（業平自筆本系統）
朱雀院塗籠本（初冠本）系統
普通本第一類
大島伝為氏筆本
神宮文庫本系諸本
一誠堂伝為相筆本
（ともに原体部分のみ）
略本―伝民部卿局筆本系諸本
広本―泉州本
真名本系諸本
普通本第二類（百二十五段本系統）
別本（古本）系諸本
（源通具本も含む）
定家本系諸本
（普通本第三類〈顕昭披見本系統〉）
小式部内侍本（狩使本）系
朱雀院塗籠本系 ←
大島伝為氏筆本↔神宮文庫本系諸本
一誠堂伝為相筆本
……↓略本―伝民部卿局筆本
↓広本―泉州本
……↓別本（古本・真名本）系諸本↔
↓定家本系諸本→

と言うことができ、そのような時期に定家が書写した建仁二年書写本は、それまでの勢語生成・伝流の集大成と現存勢語へと更に発展する、いわば袂を分かつともいうべき意味で、実に大きな意味があったと言えるものであるように思われるのである。

しかし、その定家建仁二年書写本とて、最初にも述べた如くに自筆本は現存しておらず、冷泉家本と専修大本という、後代の転写本が二本、伝存しているのみである。この両本にはもちろん、共通本文等も数多く存在し、まさに定家建仁二年書写本の姿を髣髴とさせ得る面も存在する一方、後世的要素も混在してかなりの数の異同も実は見られている。以下、それらの実態を、先行研究の成果とも合わせながら見ていくことにしたいと思う。なお本文は、冷泉家本が平成十年朝日新聞社刊の冷泉家時雨亭叢書第41巻の写真版、又専修大本が、古典籍影印叢刊刊行会編の影印本によるものである。

## 三

ではまず最初に、この両本の識語等の形態上の差異等に関してからであるが、冷泉家本の方は、図版にも見る如く、「此物語事」という、当時の勢語諸本三本説も掲げられ、より原形を留保していると言うべく、専修大本の方はそれに対し、その次の「当初所書本」の部分から「本ニ云ク」と対校本のものを省略転載したような記され方で、その意味では後世的かとも言えるように思われるものである。又その他の勘物に関しても、片桐洋一氏によれば(2)、専修大本の勘物が、新古今集撰集の元久二年以降かなりの年月を経てからのもので

あるのに対し、冷泉家本のそれは、「定家のきわめて若い頃の所為」であり、「初期の定家本の姿をそのまま留めている」ものであるともされている。すなわちこれらの意味においては、冷泉家本の方がより善本である、ということにもなるかと思われるものであるが、その点に関しては、又あとから考えてみることにして、次に具体的なその本文につき、以下見てみることにしたいと思う。

先にも若干触れた如く、この冷泉家本・専修大本の両本には定家建仁二年書写本の姿を髣髴とさせ得るような共通本文が数多く存しており、それぞれに天福本と対校させて得られたその共通特異本文は、同じく片桐洋一氏によれば、七海兵吉氏旧蔵の古本系の伝為相筆本と最も近く、その他根源本第二系統や第四系統・時頼本・最福寺本等の別本（古本）系諸本や、先の普通本第一類・広本・略本系等と一致するものが多いとされている。又両本が「一致しない場合も実はないわけではない」ものの、総じて冷泉家本の方が「本来の本文を伝えている可能性」が大きく、定家建仁二年書写本は「未だ定家本としての特徴を備えず、いわゆる非定家本に近い」「初期の定家本の姿を留めている」ものであるとされている。しかし、この両本の異同を仔細に検じてみると、実はかなりの数の異同が認められるのであり、更に意外とおもしろい問題も浮かび上がって来るのが知られるのである。以下、それらにつき、項を改めて見てみることにしようと思う。

表1

| | 冷泉家本 | 専修大本 |
|---|---|---|
| 62 | 昔 | むかしおとこ |
| 63 | 女なけきて | 女なけきて |
| | けしめせぬ | けしめみせぬ |
| 64 | むかしおとこ女 | むかしおとこ |
| | またいと | いまたいと |
| 65 | おもほえつゝ | おほえつゝ |
| | 申たまふを | 申させ給を |
| | かなしき事 | **かなしきことさへ** |
| | なけきける | なきける |
| | まかて | **まかていて** |
| | ふきて | **ふきつゝ** |
| 66 | この女は | この女 |
| | 女しあはねは | 女しあらねは |
| | ふねとも | ふねとも |
| 67 | かいつらねて | かいつれて |
| 68 | すみよしのこほり | つのくにすみよしのこほり |
| 69 | なりけれは | なれは |
| 72 | 女もはたいと | 女に又えあはて |
| 74 | 女又えあはて | **女もいと** |
| 77 | 山はへたて | 女に又えあはて |
| | たかきのこ（朱） | **やまもへたて** |
| | たてまつり | たかきみこ |
| | あつめたるもの | **たてまつりもの** |
| | | **あつめたる** |
| 78 | わかれをとふ | わかれを、し |
| | *またつかう | いまたつかう |
| | いくはくも | いくほとも |
| 79 | むまれたまへりけり | **うまれ給けり** |
| | かけ | たけ |
| | うへつれは | うゑたれは |
| 81 | みこたち | **みこ** |
| | さけのみし | さけのみ |
| | たいしき | いたしき |
| | ふねは | **ふねも** |
| 82 | きにけんと | きにけんとは |
| | さけをのみつゝ | さけをのみつゝ |
| 83 | **えたをりゝて** | **ナシ** |
| | かへるとて | かへるとてよめる |

| | 冷泉家本 | 専修大本 |
|---|---|---|
| 84 | さるに | さる |
| | さらぬわかれの | さらぬわかれも |
| | ありといへは | **ありといふを** |
| 85 | 人みなゑひて | 人みな人ゑひて |
| | いといたう | いたう |
| 87 | たきの | さるたきの |
| | こほれをつ | こほれおつる |
| 91 | そのみるを | **みるを** |
| | *かしはおほゝて | **かしはのおほひて** |
| | かしはに | かしはのはに |
| 94 | わたつうみの | わたつみの |
| | 三月つこもり | 三月のつこもり |
| 96 | おのかきこゆる事をは | をのかきこゆることを |
| | もちはかりなりけれは | **もちはかりなれは** |
| | いてきにけり | いてにけり |
| 97 | 身にかさ | 身にかさ |
| | いなんすなり | いなんとすなり |
| | あしくてやあらん | あしくてやあるらん |
| | まかふかに | まとふかに |
| 99 | たてたりける | たてりける |
| | やりける | **やれりける** |
| 101 | 左兵衛督なりける | **さゑもんのかみなる** |
| | 人をおほみ | 人おほみ |
| 102 | よまさりけれと | **よまさりけれとも** |
| 103 | あひいへりけり | **あひいへり** |
| 104 | あまになれる人 | あまになれりける人 |
| 105 | やつしたれと | やつしたれとも |
| | いひやりたり | **いひたり** |
| 107 | えよまさりけれは | よまさりけれは |
| 108 | まとひにけり | まとひけり |
| | ゝおひける | き、て思ひける |
| 111 | なくなりに | **おとこなくなりに** |
| 114 | ありもやしけん | ありもやらん |
| | おもひけれともつきに | おもひけれともとつきに |
| 123 | きみはこさらん | きみかこさらん |
| | 心ちのしぬへく | 心ちしぬへく |
| 125 | おほたかの | おほたかの |

## 四

まず表1は、冷泉家本・専修大本両本の主な異同を列挙してみたところのものである。冷泉家本は、62段以降の後半部分のみの巻子本の零本であるため、対校も必然的にその後半部分のみに限定せざるを得ないが、見る如くにかなりの数の異同が存しているのがまず看て取れる。表中、各本文に無記載のものは、その本文が通行大勢本文に合致していることを意味し、＊一個を付したところのものは、その本文が独自異文であることを、又両方に二個を付したところのものは、各本文に合致する伝本が、それぞれかなりの数で存していることを示しているものである。又各本文に特異的に合致する伝本を、池田亀鑑・山田清市両氏の校本から博捜してそれぞれの伝本略号で示したが[3]、丸で囲んだ漠数字は、根源本第〇系統の各系統数を、又㊁は武田本系統を総称して表示したところのものである。

ところで、ここで看取され得る大きな特徴の一つは、専修大本の方が独自異文や、先の片桐氏の指摘にも見られた別本（古本）系諸本や普通本第一類・広本・略本系諸本、又小式部内侍本（狩使本）系統等に合致する本文が多いのに対して、冷泉家本の方は意外と通行大勢本文と合致するものが多い、という点である。このことは、この両本の特徴や来歴等を考えるに当たり、ここで押さえておくべき重要な点であると思われるものである。

次に表2は、実は[4]専修大本にはかなりの数の異文注記や傍記・合点等が見えているところから、それらの部分を中心とした両本の異

表2

| | 冷泉家本 | 専修大本 |
|---|---|---|
| 63 | 世心つける女 | ＊ 世心 **よしつける女** かり |
| | あはれかりて | ＊ **あはれにて** |
| | ＊衣片敷今夜もや | 衣片敷今夜 |
| | | ころもかたしきこよひもや |
| | ＊恋四季人 | 恋四季 |
| 65 | みさうしには | こひしき人 さうに は |
| | ものゆへに | ＊＊ みしやうしは ゆへに |
| | | ものなれと へを |
| 66 | なにはつを | 大神 ＊なにはえの |
| | | うを |
| 67 | うしとなりけり | をしとなりけり |
| | | 雁鳴て |
| 68 | かりなきて | かきりなく さ |
| 69 | つかひさね | 神誠 つかひむね |
| | | 小 日 |
| 74 | あはぬひおほく | ＊ **あはぬかおほく** |
| 80 | としの内に | としのうちに |
| | | ふしのはな |
| 82 | ＊伊堂々佐久良ハ | 塗 伊堂々佐久良ハ |
| | | いと、さくら |
| | | 給ひ |
| 83 | あかしたまふてけり | ＊あかしたまうけり |
| | | り |
| 85 | たまへりけり | たまへりける |
| | き本写之 | き |
| 87 | なたのしほやに | なたのしほやに |
| | | にて |
| | おほきさにて | ＊ **おほきさにはかりにて** |
| | | して |
| | とほくして | とほくて |
| | ㊁侍 | |

| | 冷泉家本 | 専修大本 | |
|---|---|---|---|
| 93 | いとになき | いときなき | 承通 |
| 94 | ひとひふつか | ひとひふつか | 真 |
| | ち、のあき | 一二日 秋 | |
| | ひとつの春に | ち、の春 春 | 大神小 |
| | | ひとつのあきに | 大神小誠 |
| 96 | 女身に | 身 | |
| | | 女もとに | * |
| | その人のもとへ | の | * |
| | | その人にもとへ | |
| 97 | ちりかひくもれ | くもれ | 塗誠 |
| | | ちりかひまかへ | |
| 103 | いやはかなにも | に | 塗 |
| | | いやはかなくも | * |
| 111 | とけんを人は | を | |
| | りい（朱） | •とけんを人は | * |
| 121 | まかつる | まかりいつる | 四兼・相・塗 |
| | | まかつる | |

同を検じてみたところのものである。ここでも先の表1で指摘され得たのと同じような特徴、すなわち専修大本の方が独自異文や別本（古本）系諸本・普通本第一類・広本・略本・小式部内侍本（狩使本）系統等に合致する本文が多いのに対して、冷泉家本の方は通行大勢本文と合致するものが多いという点が看取され得るところであるが、ここでは更に、専修大本に付された異文注記や傍記・合点本文等が殆どの場合、実は冷泉家本の本文に合致しているという事実が指摘され得るように思われる。これは、＊を付した63段や82段に見られるような特異な表記に関しても言えると思われるものであるが、もっともそうだからと言ってこれらの両本が、直接の影響関係にあったかどうかはなお慎重でなければならないところであるものと思われる。しかし、合致していないところは＊を付した、65段と66・83・111段の四箇所のみであり、この中66段は、「なにはえの」見せ消ち「なにはへを」であり（以下、表中で傍線を付したところは、その部分が見せ消ちにされていることを示したものである）、「なにはへを」本文は大島伝為氏筆本があるのみであるが、冷泉家本等をはじめとする大勢本文は「なにはつを」であり、言うなれば、ここは判別し難い「へ」と「つ」の違いに帰せられてしまうところであって、あまりその意味では大勢には影響ないと言えるように思われるのである。又83段も「たまう」に対する傍記の「給ひ」であるが、これもそこに掲出した諸本に見られるような、漢字表記のいわば読み方の問題に帰せられてしまうところであり、必ずしも「たまひ」本文が存した否かは判然としないとすら言えるように思われるものである。よってこれらを除けば、111段の見せ消ち独自異文である「とけん人をは」と、65段の「みさうには」の二例のみが、先の原則に合致していないということになるのである。

なお、次の表3は、今度は冷泉家本の方に存する朱筆の傍記等の箇所を特に検じてみたところのものであるが、ここは、それぞれに合致している伝本がかなりの数で存している例が多く、63段の「綾筵」のようなおもしろい本文の例も、稀には見られないわけではないものの、片桐氏の言われる「定家本による校訂」ということで、[3]とりあえずは良いのではないかと思われるものである。

さて、以上、冷泉家本・専修大本両本の異同箇所、並びに特に専

**表3**

| | 冷泉家本 | | 専修大本 | |
|---|---|---|---|---|
| 63 | 狭綾に　て | * | 狭綾さむしろに | |
| 65 | ありきつゝ｜る（朱）の誠 | ㊀明・通 | ありきて | |
| 69 | かけたりけれはかり｜る（朱） | | かけたりけれはかりの | ㊁醍・相最・大神塗真小 |
| 86 | やれりけり | ** | やれりけり | ** |
| 87 | いしのおもてに（朱）な（朱） | ** | いしのおもて | ** |
| | たかさ　け（朱） | ** | たかさ | ** |
| | いつれたかはん　に（朱） | 武斎・小 | いつれたかけん　方 | |
| | わかすん方の　思（朱） | ** | 我すむかたの | ** |
| 93 | おきてをもひわひて | ** | をきて思ひわひて | ** |
| | ろうして（朱）れ　やりける | ㊀明・真小 | らうしてよみて［やりける］ | ㊁為明醍・良・泉神 |
| 94 | よみて　或本ちへ | | | |
| | たちまさるらん（ほいまろきみ朱） | ** | たちまさるらん | ** |
| 98 | おほきおとゝ　りける（朱） | ** | おほきおとゝ | ** |
| | いひやれる　る（朱） | | いひやれる | 相・泉塗小 |
| | たまひけり　とく（朱） | | たまひけり | 相・大神小 |
| 120 | はやせなん　クミテ | ** | とくせなん | ** |
| 122 | 手にむすひ　りけ（朱） | ** | てにくみて | ** |
| 124 | いかなることを | ** | いかなることを | ** |

修大本の異文注記や傍記・合点箇所等につき、見てきたわけであるが、ここで簡単にこれまでのところをまとめておくことにするならば、定家建仁二年書写本の姿を現在に伝える伝本としては、その識語や勘物、又本文全体等からすると、むしろ冷泉家本の方がより善本であるようであり、その共通特異本文は別本（古本）系や普通本第一類・広本・略本系等に合致しているものが多いということ、しかるに両本の異同箇所を仔細に検じてみた場合、専修大本の方は独自異文や、共通特異本文で見られた諸伝本との一致がより顕著に看取され得るのに対し、冷泉家本の方は、意外と通行大勢本文と合致しているものが多いということ、又専修大本に付された異文注記や傍記・合点本文等は殆どの場合、実は冷泉家本の本文に合致しているものであるということ、等々の点である。そこで、次には以上の知見をもとにして、62段以前を欠いている冷泉家本の前半部分をも一応定家建仁二年書写本の姿を現在に伝えたものとして、その姿を推定してみることにしたいと思う。手がかりは、今見て来た専修大本に付された異文注記・傍記本文・合点等の存在である。以下、項を改め、表4で詳しく見ていくことにしたいと思う。

## 五

表4は、主に62段以前の専修大本に付された異文注記・傍記・合点等を中心に列挙してみたところのものである。表中、＊一個を伝本略号に付したところのものは、その伝本が専修大本の傍記・イ本本文に合致するものであることを、又二個を付したところのものは、

**表4**

1 かきり
**かすもしられす**　*
4 五条のきさきとあるほんには　顕昭『古今集注』
6 **けなまし**ものを　*
**物は**
方に
8 あつまのかたへ　肖小藤
れり
しろくふりたり　塗
わかる
11 なりぬとも　(*)
女
12 人をはくさむら　*
もへる
14 **せちにおほゆる**　*
に
といへるを　神藤
一本クワ　一本アネ
くりはらのあれは　**
17 むかしところ　時神塗真参
雪也
18 しらきくの　㊃兼・大
たわゝ
とを、に　*大神泉塗真誠む
そ　る
そてかともみゆ　大神塗真む
19 段末小字補入　**㊆明・真
しうイ
けうし
21 けに　参　(**)
けれといつこをはかりともおほえさりけれはかへりいりて
とみかうみみれはかへりいりて
おもかけにのみいと、みえつ、
かけにみえつ、わすられぬかな　誠
世
**をのかま、に**　*
夜の
22 **あきのよを**　*

*

23 わイ
たれかあくへき　*泉
夜はにや
**ひとりやきみか**　*
ひとり
**よはにゆくらん**　*㊁家醍・七・為承最時・大神塗小
に
まつを　㊁氏・㊃順・千・相最・泉
ぬ賦
こひつゝそふる　**
なみたそさはくらし
26 みなとのさはくかな　*泉大む
の
ふねも　㊆高・承・大誠む
よりし許に
よせつはかりに　誠
くち
27 **みなかみに**　*
く
28 いふかひなかりて　大参　*㊆永・㊁・相栄最・神泉塗真
花　賀
29 はなのえん　大神泉塗誠参
に
31 よしやくさはの　*㊆孝川尊教・む
ひと
33 ゐなかの　誠
34 詞章部分ナシ　*
36 かへし　㊆高・㊁明醍・㊄・最時・大神泉塗誠む
いつはりにおもふ…　(6)守山八幡宮本伊勢物語抄
に
38 ありつねかり　*肖最時・誠
世中の
よのなかに　大通
人はこれをや
**これをや人の**　*
無き
39 ゐていて　*㊅天・隆・通誠む
おとこなく〳〵よめる

えられるものである。しかるに26段の「そてにみなとのさはくかな」に対して付された「なみたそさはくらし」というイ本本文は、泉州本と大島伝為氏筆本・武者小路本が一致する本文であり、又23段の「たれかあくへき」に対して付された「わくへき」なるイ本本文や、55段の「えいふましく」に対して付された「えあふましく」という傍記本文はそれぞれ泉州本・大島伝為氏筆本のみが、又42段の「かはかぬに」に対して付された「かはらぬに」なる傍記本文も小式部内侍本（狩使本）系統と一誠堂書店旧蔵伝為相筆本のみが一致している本文である。もっとも冷泉家本・専修大本両本に共通の特異本文の中にもそのような例は、実際混在して見られているわけであり、例えば冷泉家本99段に見られる「返し　二条后也見大鏡」という注記的本文も、実は大島伝為氏筆本や泉州本に見られる同様の「二条后高子」とあるところと共通しているものであって、冷泉家本もそのような性格を有する特異な伝本であったと理解しなければならないものであるように思われるのである。なお、31段の「よしやくさはに」という傍記本文は、今度は武田本系統の数本と武者小路本が一致しているものであり、又19段の段末詞章を欠いているのも同じく武田本系統の一本と、真名本系諸本があるのみであるのが知られるものである。

さて、それではこれに対し、独自異文や別本（古本）系諸本・普通本第一類・広本・略本・小式部内侍本（狩使本）系統等に合致するものが多い専修大本固有の本文とは、一体何であったと言えるものであろうか。

これまで見てきた表1から表4にかけても特に**太字**にて示しておいた如く、専修大本には特異な固有の独自本文が、実に多く見られているのが知られる。この中、表4の34段の詞章の欠脱は、単なる誤脱と考えられるものであるが、49段には七海兵吉氏旧蔵の古本系の伝為相筆本とも共通する、「いもうとのいとおかしけなりけるを見おりて」に対して付された「一本ニきんをしらふとて可用琴説」という注記が存している。実際、そのような本文を有している伝本は、根源本第二系統の二本と時頼本の三本のみであるが、加うるに、119段末には今度は「已上二首両本ニハナシ古今ニハよみ人しらすとあり」という妙な注記も存している。これは多分、118119両段を欠いている大島伝為氏筆本や、神宮文庫本系諸本等の普通本第一類の形が注記されたものであったろうと思われ、これまでにも数多くの共通異文が指摘されてきた根源本第二系統の伝二条為明筆本等、119段を実際に欠いている伝本も見られている。又113段から117段にかけての章段序も若干乱れており、その順序を漢数字で注記している節も見受けられている。

このように見てくるならば、専修大本は純粋に定家建仁二年書写本の姿を現在に伝えたというよりむしろ、その冷泉家本との共通特異本文を別にするならば、別本系、ないしは古本系の一本と考えた方がより妥当なのではあるまいか。

従来、定家建仁二年書写本は、この専修大本がその姿を現在に伝えたものとして研究が進められ、その本文も採られてきたという経緯があるが、この専修大本で定家建仁二年書写本の姿を伝えていると思われるところは、総じてその冷泉家本と共通している部分のみであり、他の面ではそれは、いわゆる別本系、ないしは古本系の色

彩を色濃く残したものであったろうと考えられるのである。[8] 定家建仁二年書写本とはその意味で、62段以降は冷泉家本、又それ以前は専修大本との共通特異本文、並びに専修大本に付された異文注記や傍記・合点等によってのみ復元可能であるものであり、かつそれも従来の専修大本で考えられてきたものほど独自異文の多いものでもなく、また通行大勢本文と合致している面の意外と多い、ある意味ではむしろ、それより三十年後の天福二年書写本等ともそれほどかけ離れたものではなかったろうことが、ここに知られるように思われるのである。

## 六

さて、ところでここで、次なる大きな疑問や課題が二つ程、湧出してくるもののように思われる。すなわちその一つは、専修大本にも色濃くその特徴が滲み出ていた、いわゆる別本（古本）系諸本の存在をどう考えていったら良いのかという点であり、今一つは定家建仁二年書写本からいかにして、現存通行の例えば天福二年書写本等が生成・展開されていったのかという、この二点である。

結論的に言うならば、現在のところではそのどちらとも、今後の課題としていくとしか言いようはないところであるが、前者に関しては、やはりそれらも平安末から鎌倉初期辺りにかけての未だ流動的かつ過渡的な、その意味で試行錯誤的な表現が伝えられたものであり、[9] 建仁二年から始まる藤原定家の伊勢物語研究・書写に際しても、多分それらは大きな影響を与えたものであったろうと考えられるということ、又後者に関しては、やはりよりシンプルで夾雑物を含まない形が志向されながらも、なお細かくは、各章段や和歌の解釈や、言葉の選ばれ方などに対する検討も又必要となってくるように思われるということ、この二点を一応ここでは見通し的に述べておくにとどめることにし、定家建仁二年書写本が冷泉家本・専修大本両本の共通特異本文と、専修大本に付された異文注記や傍記・合点等によってのみ、復元可能であることを再度強調して、以上で一応本稿は終わりとすることにしたいと思う。

## 注

（1）拙稿「伊勢物語諸本論とその本文」王朝物語研究会編『論叢伊勢物語1　本文と表現』（平成11年・新典社）所収）。

（2）『伊勢物語の新研究』、昭和62年、明治書院。

（3）その他、両校本に掲出されていない伝本略号と使用本文は、次の如くである。

泉＝泉州本（武田祐吉博士翻刻本）
塗＝伝民部卿局筆塗籠本（日本古典文学会複製本）
通＝通具本（築地書館複製本）
真＝寛永廿年版真名本（宮内庁書陵部写真紙焼本）
小＝小式部内侍（狩使）本（拙著『狩使本伊勢物語　復元と研究』所収の底本）
誠＝一誠堂書店旧蔵伝為相筆本（田中宗作・杉谷寿郎両氏による翻刻〈語文第61輯所収〉）

参＝『参考伊勢物語』所引為家本（岩波文庫本）
む＝武者小路本（『伊勢物語に就きての研究〔補遺篇〕』所収）
藤＝藤房本（『伊勢物語に就きての研究〔補遺篇〕』所収）
なお神（＝神宮文庫本系諸本）は、宮内庁書陵部蔵の阿波国文庫旧蔵本で代表させた。

（4）これらは中田武司氏によれば、二種類の同別筆になるものとされているが（「伊勢物語寂身本補遺弁」専修人文論集第16号、昭和51年3月）、その一つ一つの判別はなかなか付け難く、よってここではその厳密さはあまり期さずに考えることとした。

（5）冷泉家時雨亭叢書の解題。

（6）片桐洋一氏に紹介されているところによる（『伊勢物語の研究〔研究篇〕』〈昭和43年、明治書院〉）。

（7）拙稿「伊勢物語40段の異本歌をめぐって」国語国文研究第78号、昭和62年9月。

（8）その意味では今後は誤解を招かぬよう、専修大本は「建仁二年寂身本」ではなく、「専修大学蔵寂身本」とする方がより適切かと思われる。

（9）特に表4の最初に見られる専修大本の4段末尾には「五条のきさきとある本には」とあり、顕昭の『古今集注』（歌学大系本）に「五条ノキサキトアル本ニハトカケリ」とあるところと一致している。すなわちその意味では専修大本は、顕昭披見（所引）本の一本とも言えるものである。

（はやし　よしろう・三十三回生）